天野先生がインタヴューのときよくするという「患者さんと握手」のポーズ。どれだけ多くの人が、この差し伸べられた手に救われたことだろう

特別企画 ／ Interview

天野 篤

日本屈指の心臓外科医が語る

常に第一線を走り続けながら、
数え切れないほどの命を救ってきた
心臓外科医の天野篤先生。
2012年に天皇陛下の心臓手術を執刀したことでも
話題になった、誰もが知る名医です。
ご自身の過去を振り返りながら、
現在のお考え、若い人たちに伝えたいことなど、
さまざまに語ってくださいました。

Atsushi Amano

自分自身を客観視

bouquet［ブーケ］編集部（以下、b）：天野先生が心臓外科医を志したきっかけはどのようなことでしたか？

天野 篤：私が高校２年生のとき、父が初めて心臓病で倒れて病院に担ぎ込まれたことで意識し始めました。大学生の頃、心臓外科医は医師のスターでしたから、憧れもありました。不純な動機ですね（笑）。

b：医学の道は険しいだろうと想像します。

天野：芸術の世界は、過去のよいものを取り込んで新しいものを出していくことが必要だと思いますが、医学はいろいろな情報をたくさん集めて、それらを統計的に処理するという作業なんですよ。どうやって最大公約数を早く見付けるか、パズルのどこから取りかかれば早く完成させられるかという世界。だから、それに気が付けば意外と簡単です。

b：どのようなときに医師としてやりがいを感じますか？

天野：患者さんが元気に帰ったときですね。

b：患者さんに接している瞬間ではないのですね？

天野：心臓の手術の場合、患者さんは「１回の入院で約200人と接する」というドイツのデータがあります。執刀医、助手、レントゲンの職員、清掃員……、つまり患者さんが治るためには200個の歯車が必要です。治療の最初の頃、執刀医は真ん中の大きな歯車ですが、いつまでも大きな歯車でいるのは、患者さんがよくなっていないということです。だから少しずつ離れていって、看護職員が真ん中の歯車になり、執刀医は最後に足の先ぐらいの、止まっても支障がないようなところで回りながら術後の患者さんを見ている。ちょっと離れたところで「あぁ、よかったなぁ」って。そういうのが自分の理想です。次の患者さんを手術するために、元気になった人は切り離していこうという思いがあります。

b：“切り離す”ときに寂しさを感じますか？

天野：もちろんです。だけどそれよりも、自分が手術した患者さんが亡くなるという、ものすごくショッキングな出来事がありますから。自分の父親もそうですが、死んだら何も残らないんですよ。いろいろな人が「霊が残る」「魂はある」などと言いますが、外科医的には何も残らない。本人の書物やスピリットが残っているのは、周りの人が残しているから。今まで元気だった人でも“突然不整脈が出て間に合わなかったからアウト”ということが起こるんです。そういうことを何度も経験しているから、患者さんが元気になって別れることは、全然寂しくはありません。

b：亡くなられた患者さんに対する先生ご自身の気持ちとは、どのように向き合うのですか？

天野：今まで自分が手がけて亡くなった患者さんは全て覚えています。本人はもちろん、そのご家族の顔も。直接手術で失敗したことはありませんが、手術後の管理のターニングポイントで、なぜこっちにいってしまったんだという思いがあるから、必ず覚えています。手術を1000例ぐらい経験した頃でしょうか、間違いの原因はこれだというものを見いだし、それだけはやらないように進めることで、危機管理の方向が少し見えてきました。その「絶対にやってはいけないこと」を回避する、または克服して進めば、それが原因で患者さんが亡くなることはありません。

b：他に手術のときに気に留めていることはありますか？

天野：自分自身のメンタルとフィジカルとテクニック、それといろいろな空気でしょうか。例えば昔、自分の体調が気象や潮位によって管理されているかもしれないという思いがありました。自分を自然界の中のちっぽけな一人の人間だというふうに客観視するようにしたら、ある時期から、迷ったときにはもう一人の自分が「そっちに行ったらだめだよ、そこは止まれ、よく考えろ」とささやきだした。全体を俯瞰して流れに身を任せながら決断して方向を決める。そういうことが30代の終わり頃からできるようになりました。

b：お若い頃から視野を広くもって決断してきたのですね。

天野：あまのじゃくだったのかもしれませんが「周りの人がすることをあえてしない」選択と、「周りの人がやってきたことの中で正しいと思うことをサポートする」選択。この２つの選択をしながらやってきました。そのヒントになったのが、映画『インディ・ジョーンズ』の、車から飛行機に飛び移る場面。医療においても、あるときはこっちに、またあるときはこっちに飛び移ってということができないかと思いながらやってきました。

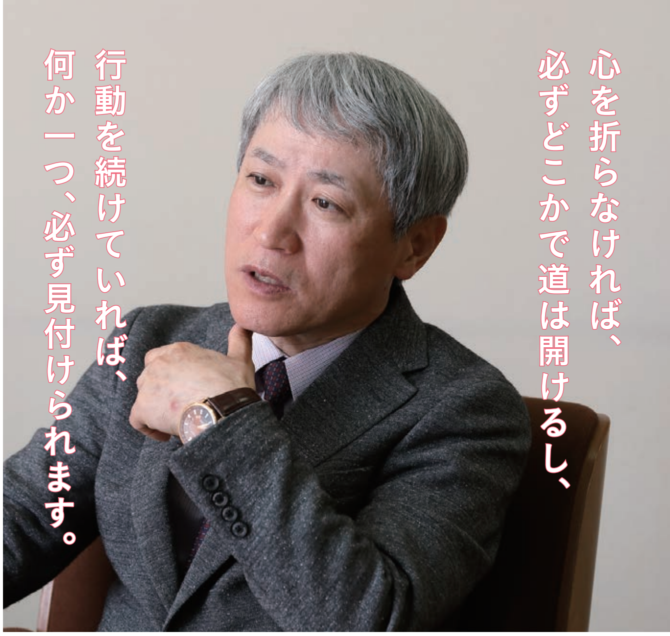
忘れられたら完璧

b：手術の技術を磨くトレーニングはありますか？

天野：私は患者さんに向き合い、現場の積み重ねで技術を身に付けてきました。机の上での練習はしませんでしたね。

b：机の上で練習するかたもいるのですか？

天野：います。現在の学会での若手への指導はその方法です。でも私の場合は、現場の雰囲気を感じながら進めます。「勝てる勝負」となる手術に持ち込むスタイルなので、痛い目にあったことはありません。経験値の浅いときは“完全”ではなく、勝負できる８割ぐらいの



ところだけ勝負して、残りの２割は患者さんのケアの部分を進めました。自分の問題点を見据えて傾向と対策を練り、手出ししたらいけないところは見極めておく。絶対に犠牲を払わないようにやっていく。それでも、経験と立場が上がってくると、自分に絶対の自信がもてないのに避けて通れない患者さんが必ず出てくるんです。その患者さんのときには、100パーセントではないけれど、チャレンジしないといけないところはチャレンジします。それがうまくいけばよいのですが、トラブルを生じて亡くなられた場合、私は「自分が未熟だったから、命を流れるところに到達させることができなかった。技術が完成していれば、くぐり抜けさせることができたのに」と思うわけです。患者さん自身は他の病院で断られてきているから、どうなっても悔やまないと、非常にタフなお気持ちでいるのですが。

b：病気を治すために、患者さんの気持ちは大切ですか？

天野：気持ち、栄養面、家族の力、タイミング、それら全てが重要です。私は40代半ば頃まで、とにかくあらゆる手段を使って患者さんを“その気”にさせて、手術に向かってもらうようにしていました。潮の満ち干を調べて「今日は東京湾が満潮だからあなたのコンディションは絶対よいはずだ」と伝えることもありました。

b：そう言ってもらえると、前向きになれますね。

天野：手術後の回復の過程でも、例えば気圧が低いと痛みが強くなることが多いんですよ。だから、あらかじめ天気予報を見て「低気圧が近付くので明日はちょっとつらいかもしれませんが、２日したらよくなりますよ」と伝えて、そのとおりになるとすごく信頼されます。昔から「名医」とは先を予測できる人ですから。「あなたの寿命はあと１か月です」と伝えて１か月で亡くなったら、

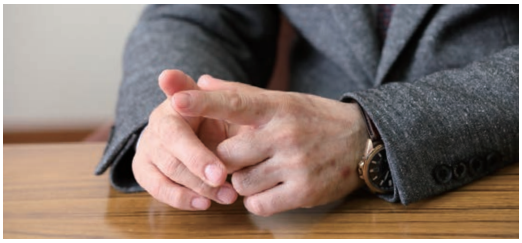
ご家族や本人には恨まれるかもしれませんが、周りからは「あの医者の言ったことは何でもそのとおりになる。名医だ」と昔なら言われる。でも、今は外科医は手術をして「先」をつくるわけですから、「死」を少しでも遠ざけて、患者さんが元気に生きられるようにしなくてはなりません。

b：「先」をつくってもらった患者さんにとっては、先生が大切な恩人になるのでしょうね。

天野：私は患者さんに忘れてもらっていいと、いつも思っています。退院したあと、病院の外で会ったら、自分が手術したことも分からない感じでその人に声をかけられる。それが意外にうれしいんです。人は亡くなったときに体を拭いてもらいますよね。そのとき「あれ、この傷は何だっけ」「いつ、どこで手術したんだっけ」、こういう言葉がご遺族から出たら完璧だと思うんです。

b：天皇陛下も先生の患者さんのお一人ですよね。その後、世間の反応はいかがでしょうか？

天野：手術からちょうど５年たった2017年２月18日、その日の新聞に「天皇陛下の手術から５年目」という文は、どこにもありませんでした。「忘れられている、完璧だ」と思いました。2018年２月18日には私の講演があり、司会者に「手術からちょうど６年目」と言われたため、「あ、そうか」と思い出しました。私も忘れていたんです。そのとき、あの手術の区切りがついたなと思いました。



ずっと走り続けて

b：医療現場での技術の進歩はどのような状況ですか？

天野：“病気の根本を治療する”という西洋医学が定着してからまだ200年ぐらいです。外科治療はこの約100年間で飛躍的に発達してきました。医療も薬も、外科技術も装備類もインストゥルメント（医療器具）も進歩したし、今のAI技術のような分析力もコンピュータのおかげで進歩した。患者自身もあらゆることをインターネットで検索できるようになった。以前はあまり選択の余地がないまま、最後は「手術しないとだめです」という状態でしたが、相当な安全性をもって治療が提供

両手を高く上げた「命をつかまえろ！」のポーズ。このポーズも天野先生が考えたという

されるようになった。そこがいちばん大きな進歩ですね。あとは循環器、心臓や脳の病気は診断装置がよくなったので、安全で確実な治療が可能になりました。がんも早い段階で発見できるようになったので、治療効果が高くなっています。膵臓がんなど、見付かった時点ではほとんど助からない病気があるのも確かですが。

b：常に新しいものと向き合っているんですね。

天野：先進的なことが必要な人は１割ぐらいの特別な領域に留まるんです。医療の８割は、普通に医学部を卒業して国家試験に受かり、日常の中で患者さんを見ながら勉強していけば通常の保険診療で対応できるような内容なんです。残りの１割が深い経験での対応を必要とします。

b：その１割に対応している天野先生にとって、先進医療とはどのようなものですか？

天野：まず、私が心臓外科医としてこれまで続けてこられたのは、この道が好きだったからです。ずっと走り続けてきて振り返ってみたら、周りの人は脱落したり方向転換したりしていた。たとえるなら「100キロ走ればそれなりの成果が待っていた」ということです。すると、もう100キロ走ってみようかなと思うじゃないですか。でも、前よりは楽に走りたいなと思って。じゃあ自転車を買ってみようかという感じですね。

大人も何とかしなければならない

b：今の若い人たちに、どのようなことを伝えたいですか？

天野：「失敗は絶対にある。だから、失敗を恐れないで、とにかく自分の意思を行動に移せ。それがうまくいっても、そこで終わりにするな。うまくいかないときはくじけるかもしれないけれど、世の中全てが敵みたいなくじけ方はするな」ということです。心を折らなければ、必ずどこかで道は開けるし、行動を続けていれば、必ず何か一つ自分がやったことを見付けられますから。それをつかむまで続けてほしいと思います。我々大人も、若者が行動を続けられるように何とかしなければならない。我々の若い頃に比べ、現在は人の寿命が15年延びています。つまり今の子どもたちは長生きするはずなので、本来勉強する期間も長くてよいわけです。我々の頃だったら、22歳で大学４年生になり、医学部だったら24、25歳で大学を卒業した。今なら卒業するのがあと10年延びたって全然へっちゃらですよ。

b：時間をかけて勉強できるようになると、一人一人の可能性も広がりますよね。

天野：しかし、今の子どもたちの多くは11、12歳で既に人生の道が大きく分かれてしまうんです。小学校受験、中学校受験とかで。昔なら18歳頃、早くても高校受験の15、16歳だったのに。その分かれた中で、さらに序列が付くわけです。また、昔ならクラスに１番から50番までの人がいたら、50番目の人が「俺のクラスのあいつはすごいぞ」みたいに１番の人を自慢して、下から５人ぐらいが皆を励ます役割を担うような社会だった。だけど今は下の人に対して「社会のゴミだ」みたいなことを平気で言うじゃないですか。上と下、その両方がいることによって成り立っているという状況にしなければ、若い人が輝きやモチベーションをもてないのではないかと思います。

b：そのように成り立つ社会はあるのでしょうか？

天野：３年前に初めてインドへ行ったときのことです。年間約6000例手術が行われる病院で、一般の患者用の入口だけでなく、少し離れたところに富裕層のための「VIPエントランス」がありました。たまたま近くにいた一般患者と話すと、「すごいだろ、この病院は。特別な入口があるんだ」と自慢するわけです。あとから聞いたら、医療費はVIPが払うから一般患者はほとんど支払わず、しかも受ける医療の内容はほとんど同じで、違いといえば特別な医療材料をVIPが使えるぐらいだという。だから「VIPの人たちがよい医療を受ければ、自分たちも元気になれる」と皆が言うんです。「50番目が、１番の人を自慢している世界」を実現していた。日本はインドに完全に負けていると思いました。

b：日本の医療についてどう感じましたか？

天野：これからは保険以外の医療を求める人に、きちんと需要があるレヴェルのものも作っていかなくてはならないと思います。その経験は、必ずフィードバックされますから。自分を振り返ってみると、心臓を動かしたままバイパスの手術をすることに最初に取り組んだきっかけがそれでした。「すごく重症だから人工心肺は付けられないぞ」と始めた方法でしたが、「重症患者でもできるなら、軽症の患者でもうまくいくはずだろう」と。そうすると経験値が増え、重症な人にもさらに適応が広がります。

b：先生が牽引してきた手術ですね。

天野：外科医の残り時間、もう少し挑戦できるかなと呼び起こされた感じです。小学生や中学生は、まだ目覚めていないだけですよ。だから、どこかで覚醒する。“大器晩成”という言葉があるけれど、「言葉じゃなくて、君が実行してごらん」「君がその言葉になろうよ」と励ましたいですね。

天野 篤（あまの・あつし） 順天堂大学医学部附属順天堂医院院長、順天堂大学医学部心臓血管外科学講座教授

1955年埼玉県生まれ。1983年日本大学医学部卒業。これまでに、新東京病院心臓血管外科部長、昭和大学横浜市北部病院循環器センター長・教授などを務めた。冠動脈オフポンプ・バイパス手術の第一人者であり、2012年２月、天皇陛下の心臓手術を執刀。著書に『最新よくわかる心臓病』（誠文堂新光社）、『一途一心、命をつなぐ』（飛鳥新社）、『熱く生きる（赤本）覚悟を持て編』『熱く生きる（青本）道を究めろ編』（セブン＆アイ出版）など。

この集団はやがて群馬交響楽団を生む土台となったと言われています。

——先生もマンドリンを演奏されるとか。

私は学生の頃からずっとクラシックギターを弾いていて、学生時代に学校のマンドリン合奏団*に所属していました。ギターが中心の活動でしたが、暇に任せてマンドリンやマンドラ（マンドリン族の中型楽器）に手を出していました。その頃から所属している「前橋マンドリン楽団」は「上毛マンドリン倶楽部」から発祥した楽団の一つで、今年が50周年。現在はそこでマンドラとギター（たまには指揮も）を弾かせてもらっています。朔太郎の孫弟子とかひ孫弟子とかになるのかもしれませんね。

——前橋市では朔太郎音楽祭が行われていますね。**

音楽祭の運営には私も関わっていて、今は実行委員会の副委員長をしています。朔太郎がスタートさせた前橋のマンドリン文化を継承しながら、市民のものとしてもり立てていこうという思いがあります。

世の中はおもしろい

——児童文化センターの館長になったとき、どのような思いでスタートしましたか？

平成13年当時、ここはまだ古くて暗かったんです。老朽化で雨は漏るし、「狭い、暗い、汚い、臭い……」と酷評されていました。エントランスを入るとすぐにトイレがあって、いくら掃除してもにおいはなかなか退治できない。でも、まずは活動だろうと、意気軒昂でした。ここは昔から、交通教室や天文教室、科学教室から音楽教室までいろいろなことをやっていました。思いをいっぱいもった講師のかたがたが子どもたちのやる気を伸ばして、すてきな活動をして、みんなが笑顔になる。それをいちばん大切にしていけば、十分やっていけると思いました。問題は施設ではない。教育は人から人へ。必要なのは人の思いと力を子どもたちに手渡していく組織と協働です。

▲前橋市の中心地、群馬県庁。展望フロアからは、群馬県の山々を見渡すことができる

——ここは、貴重な体験ができる場所だと感じます。

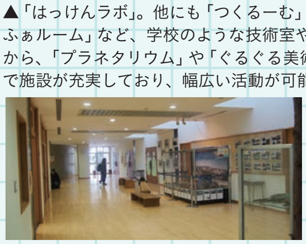
平成24年に新装になった児童文化センター（公園部分は、前橋こども公園）は天気の良い休日なら1日3000人以上、年間45万人の来場者があります。平日は学校の交通教室、天文教室、環境教育の場（教育課程の実施）として機能します。土・日・祝祭日や長期休業日などには、合唱やオーケストラ、演劇、発明クラブ、環境冒険隊、宇宙クラブなどのクラブ活動や、多様な文化・芸術に関わる教室などの社会教育事業を展開します。また、公園部分を中心に多くの子どもたちが大型遊具や冒険遊び場、芝生広場などで「学びと遊びの交流活動」を行っています。友達同士のトラブルもあるし、迷子も出るし、すりむいたり、ちょいとけんかしたり、いろんなことがある。小さい頃は自由に遊ぶと痛い目にあうこともあるけれど、「痛い」と思うすれすれのタイミングを自分で計るのがおもしろいんですよね。それから、夕刻から望遠鏡を担いで学校の校庭などに出かける移動天文教室。子どもたちは夜、暗い中でみんなと一緒にいるだけでうれしくてしょうがない。わいわいしたがる子どもたちを星空の世界に引き込むのが私たちの楽しみ。「目ではよく見えないのに、何で望遠鏡では見えるの？」って聞いてくるので「人間の目玉は小さいけど、望遠鏡の目玉はこんなに大きいからだ」と、赤や青白にきらめく恒星を望遠鏡で見せて、問いかけていきます。「太陽って遠くから見ると何色に見えると思う？」「まぶしくって見えないよ。」「じゃあ太陽って何で落っこちないの？」「……（都合が悪くなってくると答えないな、と思いつつ）君は今地球の上に立っているでしょ？ 地球が引っ張ってくれているからだよ。太陽だって引っ張ってくれるものがあれば、ここに落っこちてくるんだよ！」って煙に巻いたようなことを。子どもという哲学者は、いつだっておもしろいですよね。

——子どもたちに、どう成長してほしいですか？

自分自身で生きていける人間になってほしい。自分の足できちんと立って、自分の手で稼いで、生きることは自分の責任だと考える大人になってほしいです。でも今の子どもたちには、そのための体験が足りない。自分の手で作業したり、何度も失敗しながら試行錯誤したり、友達とつかみ合いのけんかをしたり。現代という時代、子どもが砂場に行こうとしたら「手や服が汚れるからだめ」と言われ、「友達とはけんかするな」と制され、「時間がもったいないから答えを速く出せ」とせかされる。結果、子どもは無菌状態で、砂場の感触も知らず、木に登るときの自分の筋肉の感触も知らず、友達と折り合いをつけようとする魂も育たず。そうしていくうちに世の中に出て行く意欲、本当の喜びも楽しさも知らないまま、人から与えられたものだけで自分の世界が構成される。それはとっても寂しいことですよね。だから、ここ児童文化センターは、子どもが自分から活動する多様な体験を企画する中で、「世の中はおもしろい」ということを伝えられたらといいなと思っています。

▲実際に体験できる展示が多くある

▲「はっけんラボ」。他にも「つくるーむ」「どれみふぁルーム」など、学校のような技術室や音楽室から、「プラネタリウム」や「ぐるぐる美術館」まで施設が充実しており、幅広い活動が可能


▲広くて明るい館内の２階

* マンドリン合奏は、マンドリン属の楽器と、ギターを主として編成される。
**「朔太郎音楽祭2018」が平成30年10月14日14時30分より、昌賢学園まえばしホールで開催される。

教育百景

おしえ・そだてる日々

学校とは異なる環境で、教育活動を行っている先生をご紹介する新連載が始まります。第1回は、群馬県の前橋市児童文化センター館長を務める佐藤博之先生にお話を伺いました。

学校での15年間

―先生のご出身はどちらですか？ また、館長になる前、先生はどのようなことをしていたのですか？

群馬県伊勢崎市出身で、高校生の頃からずっと前橋に住んでいます。大学卒業後、理科の教員をしていて途中で教育委員会へ異動になり、青少年課で健全育成や非行対策をしていました。学校教育課の指導主事などを経て、前橋市児童文化センター館長を6年間。そして1年間は前橋市立荒牧小学校校長を務め、再び教育委員会に戻って2年間指導部長をしたあと、8年間教育長を務めました。

―教員生活はいかがでしたか？

ほんとうに楽しく、いい思いをたくさんしましたね。子どもって思いもよらない発想で質問をしてくるんです。「力」の学習をしていると必ず『力』って何ですか？」と聞いてくる。「磁石」の力のところに入ると「なぜ磁石は力をもっているのか？」。「重力」のところでは「引力のもとは何か？」とか。目に見えない抽象的な概念です。子どもは小さな科学者でもあり追究の手を緩めない哲学者（形而上学者）でもある。理科教師として最初の頃はそういう質問に答えられない自分がいて、「神様がそう言った」などと言い訳して……そうこうしているうちに生徒も問うことを忘れる。「無疑問症」の始まりです。そんなことを繰り返していると、この世界で教えるべきこと、自分が教えたいこと、いろんなことが見え始めてくる。すると「子ども」も「子どもの学びを組織する行為」も「子どもの底抜けのひょうきんさ」も、全部すごくおもしろい。あとは子どもを「学び」……真理に近づくと言ってもよいかもしれない……に引き込むための仕掛けを考えるのがおもしろかったですね。5メートルくらいの紐をつけた大きな振り子を作って、吹き抜けにぶら下げて「みんなで数えるぞ！ いーっかい……」と振動数を数える。30メートルのシロナガスクジラの実物大の絵を校庭に描く企画を生徒と一緒に考えるなどね。いろんな企画をして子どもと一緒に活動するのが楽しかったですね。

第1回

佐藤博之（さとうひろゆき）先生

佐藤博之
前橋市 児童文化センター 館長

▲児童文化センターは広々とした前橋こども公園内にある

―真剣に子どもたちと向き合ってきたのですね。

教員生活最後の年は、中学2年生の担任をしていて「2年間かけて一緒にこの学級をつくっていこうな」と、子どもたちと約束したのに、年度末の2月に教育委員会への異動が決まり、子どもたちに知らせる前に新聞に載ってしまった。子どもたちは大騒ぎをし「先生ずるい」と言われました。

―生徒たちは寂しかったのではないでしょうか？

終業式のとき、ある女の子が中心になり子どもたちで「先生にお花を一本ずつ渡そう」ということになったらしく、生徒一人一人から、泣きながら一本一本バラの花をいただきました。後日同窓会で聞いたら、その子はある演劇クラブに通っていて、どうも芝居を仕掛けたらしい。「だまされた！」「だましてない！」と懐かしい日々をもう一度楽しみました（笑）。

―〝芝居〟としたのはてれかくしでしょうね。

私、教員を15年間しかしていなかったんです。教育長のときも含めて教育委員会に20年以上いたので行政関係のほうがずっと長くなっちゃった。けれど、学校のこと、子どもたちのこと、授業のこと、その喜びを忘れたことはありません。

朔太郎文化の継承

―前橋市は、詩人・萩原朔太郎（はぎわらさくたろう）の生地ですね。

朔太郎はのちに「日本近代詩の父」と称されるようになりましたが、大正初期に「詩」に関わる活発な活動とともに、当時まだ珍しかったギターやマンドリンを弾いたり、同好の士を募って合奏団を組織したりしていました。「前橋に全国に誇れるような文化を生み出したい」と考えた朔太郎は、前橋で「ゴンドラ洋楽会」（のちの「上毛マンドリン倶楽部」）という合奏集団を立ち上げました。

Volume. 2

復興応援企画

人とまちと、その先と ──

マエストロ広上淳一、小田美樹先生に会いに行く

『群青』誕生の地、福島県南相馬市へ

「群青の海」を見つめる広上淳一さん

「復興応援企画」として被災地の現在をお伝えする本連載。
東日本大震災を体験した福島県南相馬市立小高中学校の生徒たちと、
音楽科教諭の小田美樹先生によってつくられた合唱曲『群青』は、
2013年に発表されて以来徐々に全国へと広まり、大切に歌われてきました。
『群青』に感銘を受けた世界的指揮者の広上淳一さんが、
小田先生を訪ねる様子をレポートします。

わかったつもりになる怖さ

東日本大震災から7年の歳月が過ぎました。たくさんの歌が生まれましたが、中にはいつの間にか消えてしまった作品もありました。それはある意味、音楽のチカラと同時に「無力感」を僕たちに伝えてきました。その中にあって忘れられない曲、それが『群青』です。南相馬市小高区で生まれたこの曲に出会い、深く感動した指揮者の広上淳一さんが、『群青』の生みの親である小田美樹先生に会うため、相馬市立向陽中学校へ向かいました。

◆

広上：『群青』を聴いて感動し、どうしても小田先生にお会いしたくてやってきました。ほんとうに大きなお仕事をされましたね。
小田：震災後、押し寄せてくる仕事に取り組みながら、「あぁ、この状況はこれまで誰も経験したことがないものなのだ。それならば、私たちしか経験していないこの状況から何かをつくるしかない」。そんな思いから『群青』は誕生しました。震災を通して自分たちに何ができるのか、それをずっと考えてきました。

広上：僕は震災や原発事故を直接経験していません。どうしても「わかったつもり」になってしまう。そこが怖いと考えています。
小田：ここ向陽中学校は相馬市にありますが、小高中学校があった南相馬市とはいろいろな面で震災に対して意識が異なります。何より原発からの距離が違うのです。それに今の中学生たちの中には、震災の記憶があまりない子もいます。でも、そんな子どもたちとも『群青』を通して体験を共有することができます。

左から坂元勇仁さん、小田美樹先生、広上淳一さん。現在、小田先生が勤務している相馬市立向陽中学校の音楽室で

社会に貢献する教育を

広上：『群青』を歌った生徒さんたち、今、20歳なんですってね。

小田：はい、そうなんです。私にとっては、あの先の見えない時間を共に過ごした大切な存在です。いろいろな苦難と一緒に闘ってきました。私たちは自分たちから『群青』の話をすることはありません。でも、『群青』を通していろいろな人たちがつながって、震災のこと、東北のことを忘れずにいてくださることをとてもうれしく思っています。

広上：僕は音楽大学で教鞭を執っています。今、東日本大震災のような大きな災害が起こったとき、音楽大学として何ができるか、ということが問われています。大学そのものが変革を求められている現在、より社会に開かれ、より社会に貢献できる大学の姿も模索していきたいと思います。

小田先生と広上さん

　広上さんは小田先生との対談後、小高中学校の卒業生である齋藤舞子さん、牧野智史さんと南相馬市小高区で懇談。齋藤さんはいわゆる「群青の子」と呼ばれる学年の生徒で、今は看護師を目指して猛勉強中。「私には都会で仕事をするというイメージが湧きませんでした。地元に残り、地元のかたたちのために働くことが私の幸せにつながると思います」。そんな齋藤さんの言葉に目を開かされる思いがしました。

小高中学校の卒業生、牧野智史さん、齋藤舞子さんと一緒に

取材：2018年4月18日
相馬市立向陽中学校（福島県）

津波で失われた「生活の場」に
育つ木と花（小高区）。南相馬市
小高区は福島第一原発事故により
警戒区域に指定され、小高中学校の
生徒たちをはじめ、住民は全国へ
離れ離れに避難した。
2018年3月31日現在、
震災前の登録住民12,834人のうち
2,640人が帰還している。

写真：井上千歌

Writer 坂元勇仁（さかもと・ゆうじ）
レコーディング・ディレクター、大阪芸術大学客員教授、東京音楽大学特任講師。学習院大学大学院博士前期課程修了。
著書に『明日も会えるのかな？　群青 3.11が結んだ絆の歌』（パナムジカ）がある。

One day, one moment

［ワンデー ワンモーメント］

フォトエッセイ

写真・文：ヒダキトモコ
Photo・Text：Tomoko Hidaki

３枚目

タクト

何層にも重なり合った美しい音色が胸に迫ってくる。ステージ脇の小窓から、目の前に広がる音楽の姿を捉えようと、息を詰めて一瞬を狙う。

暗闇の静寂の中、シャッター音を消して小窓にレンズを密着させ、身動きできない状態で指揮者のマーティン・ブラビンズさんの動きに集中する。ドアの向こうはステージで、コトリ、と音を立てることも許されない。

音のうねりごとその胸にたぐり寄せるような、彼のタクトに自分も引き寄せられ、ドキンと胸が高鳴った瞬間の一枚。２０１７年５月16日、東京オペラシティ コンサートホール。東京都交響楽団、第831回定期演奏会より。

ヒダキトモコ

写真家。日本舞台写真家協会会員。

東京都出身、米国で幼少期を過ごす。慶應義塾大学法学部卒業。会社員を経て写真家に転身。音楽誌・経済誌等の表紙・グラビア、各種舞台・音楽祭のオフィシャルカメラマン。ステージ写真、ジャケット写真、写真集等。官公庁や企業の撮影も多数。撮影スタンスは自然体、人の内面的な魅力やイキイキとした写真表現を大切にしている。

http://hidaki.weebly.com

次代につなぐ
03
校長先生の講話

本連載では、学校長を務められた先生が、これまでに学校で子どもたちに語り届けた講話をご紹介します。
第3回は、かつて音楽科教諭をしていたあやめ野中学校に、校長として戻ってきた木村七郎先生が、過去に起こった悲しい出来事や命の尊さについて生徒たちに伝えた講話です。

木村七郎（きむら・しちろう）
酪農学園大学附属とわの森三愛高等学校特別職
千歳吹奏楽団指揮者
日本国際飢餓対策機構 ハンガーゼロ・アンバサダー
日本国際飢餓対策機構 ハンガーゼロ・北海道連絡所長

第3回　木村七郎 先生（札幌市立あやめ野中学校 第8代校長）

交通安全の日

定年退職して早5年目となりました。毎年5月7日になると、
かつての仕事仲間たちと“家庭訪問”をする家があります。
この日は、お母さん、当時の学年主任、担任、柔道部顧問、そして生徒指導部長（私）とで、
クラス会のように懐かしく心温まるひとときを過ごします。
今年も21回目の家庭訪問をしました。
それは「笑顔で出かけた我が子が笑顔で帰ってくる」という、そんな当たり前のことが、
親にとっては何よりも大切な願いなのだということを思い知らされた出来事でした。

私は、平成元年の開校から10年間、本校の音楽教師をしていました。そして一昨年、校長として12年ぶりに、ここに帰ってきました。
本校に帰ってきていちばん驚いたことは、今でも「交通安全の日」が残っていたことでした。
平成9年5月7日に起きた生徒の悲しい出来事のことを、今でも全校生徒が知っていることに驚き、そして深い感謝の気持ちでいっぱいになりました。
今もときどき、朝の打ち合わせ時間に、生徒が間違えて職員室のドアを「ガラッ」と開けてしまうとき、私は反射的に心臓がドキッとなります。
平成9年、ゴールデンウイーク明けのその日も、打ち合わせ中に職員室のドアがガラッと開きました。「生徒が車にはねられました！」と生徒が息を切らしながら知らせてくれました。
学校から300メートルほど離れた現場に駆け付けると、生徒が倒れていました。それがA君だとすぐに分かりました。
救急車が来てすぐに心臓マッサージが始まりました。学校からの知らせでお母さんも走って来ました。手には健康保険証を持っています。そんなに大きな事故ではないだろうと思ったからです。

あやめ野中学校の「交通安全の日」。同校は昭和63年に広大な八紘学園 北海道農業専門学校の敷地の一部を譲り受けて建てられ、
そこにある約２ヘクタールの花菖蒲園にちなんで、あやめ野中学校と命名された

この状況を直接見せてはいけないという救急車側の配慮で、お母さんを待たずにサイレンを鳴らして救急車は出発してしまいました。そこでお母さんは、はじめて事の重大さを知り、歩道にヘナヘナと座り込みました。そのときのお母さんの姿を私は今でも忘れることができません。

全校生徒には「生徒が交通事故に遭い救急車で病院に運ばれている」と知らせ、少し遅れて通常どおりの授業が始まりました。

昼のテレビニュースでは、「意識不明の重体」と名前入りで放送されたので、放送直後に、北海道内に住む親戚から電話がありました。「テレビで見たけれど、うちの甥に間違いはないでしょうか」「間違いありません。なるべく早く来てあげてください」ちょうどその電話を受けた私は、そのように答えました。

午後、校長先生とともに札幌医大病院に行きました。しかし、私たちが到着したちょうどそのとき、家族の願いもむなしくＡ君は息を引き取りました。本校の卒業生である兄も姉も泣いていました。

一般生徒は「意識不明の重体」の情報のままで下校させました。そして夕方のニュースでそれぞれがＡ君の死を知ることになるだろうと考えていました。集団パニックを防ぐためです。

ところが放課後、ある若い新聞記者が、あろうことかＡ君と同じクラスの女子生徒に「亡くなった生徒の下駄箱はどこですか？」と尋ねてしまったのです。それを聞いた生徒たちは動揺し、担任の先生がやっと落ち着かせて下校させました。

悲しくつらくせつないときが過ぎ、2日後全校生徒が玄関前の遊歩道に整列し、棺を見送りました。
それから事故現場には小さな花畑が作られ、たくさんの陳情活動が行われました。ガードレール、道路の改良、標識や信号の設置。そのときの働きかけで、今日皆さんが日常見ているさまざまな交通安全の対策が講じられました。
全校生徒・保護者・地域のかたがたの心からの願いは、豊平区役所の道路責任者のかたの心をも動かし、私たちが当初希望した金属によるガードレールではなく、今皆さんが通学路で目にしている緑のガードレールが設置され、願った以上の形となりました。
そこに全校生徒・保護者・地域のかたがたが力を合わせて花壇作りを行い、それは「命の花壇」と名付けられ、この危険な通学路は「あやめのロード」と命名されました。そして、そのスピリットはこうして今もみごとに皆さんに引き継がれています。

事故からちょうど1年後の平成10年5月7日に「A君をしのぶ集会」が開かれました。この集会は、全校生徒がチャイムとともに廊下に整列し、体育館に集まり、教室に戻るまで一切の私語をせずに無言のまま、本当に学校全体がシーンと静まり返り、気持ちを一つにしての集会でした。もちろん先生がたからひと言の注意の必要もありませんでした。
現在の、静寂に包まれた本校の集会時マナー、廊下の整列、体育館の入退場時など、その集会が原点だったと思います。

「笑顔で出かけた我が子が笑顔で帰ってくる」という、そんな当たり前のことが、親にとっては何よりも大切な願いです。皆さん、どうか命を大切にしてください。

（平成25年5月7日、札幌市立あやめ野中学校における「交通安全の日」講話より）

「命の花壇作り」。生徒たちが「あやめのロード」にジャーマンアイリスの苗を植える様子

「あやめのロード」に植えられ、花壇で花を咲かせたジャーマンアイリス

この「交通安全の日」は現在
「命の花壇作り」「校区内清掃」「交通安全講話」を柱として、
今も引き継がれているそうです。私は第8代校長でしたが、現在は第10代鈴木康裕校長先生が、
すばらしい学校作りに邁進されています。実は鈴木校長先生は、当時のA君の担任であり、
毎年欠かさず私たちと一緒に家庭訪問している一員です。

上野耕平の

crossing

［クロッシング］

第1回

青森県JR大湊（おおみなと）線有戸（ありと）駅～吹越（ふっこし）駅間

こんな景色があるものか……。

初めてこの絶景を目の当たりにしたとき、心から驚き感動した。
JR大湊線 有戸～吹越間、海辺にまっすぐ伸びる鉄路。心が洗われる。
1両もしくは2両編成で運行されるローカル線。
この列車に乗って向かったのは、むつ市でのアウトリーチ活動。
子どもたちの純朴な感性と共に、この景色が忘れられない。

文・写真：上野耕平（うえの・こうへい）

第28回日本管打楽器コンクールサクソフォン部門において、史上最年少で第1位ならびに特別大賞を受賞。学生時代にCDデビューを果たす。2014年第6回アドルフ・サックス国際コンクールにおいて、第2位を受賞。常に新たなプログラムにも挑戦し、サクソフォンの可能性を最大限に伝えている。現在、演奏活動のみならず「題名のない音楽会」、「報道ステーション」等メディアにも多く出演している。第28回出光音楽賞受賞。昭和音楽大学の非常勤講師。The Rev Saxophone Quartet、ぱんだウインドオーケストラコンサートマスター。

Information

最新CD『BREATH －J.S.Bach×Kohei Ueno－』（日本コロムビア）が好評発売中［3,000円＋税／COCQ-85411］。
〈収録曲〉J.S.バッハ『無伴奏チェロ組曲第1番』『無伴奏フルートのためのパルティータ イ短調』『無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ第2番 ニ短調』

編集部メモ

JR大湊線は青森県上北郡（かみきたぐん）野辺地（のへじ）町の野辺地駅と、むつ市の大湊駅を結ぶ鉄道路線。有戸駅から次の吹越駅までは約12分。野辺地町から横浜町にかけての区間です。

行き方

①大湊線の起点、野辺地駅へは、
　八戸駅から青い森鉄道（青森方面）で約45分、
　または青森駅から青い森鉄道（八戸・目時方面）で約45分。
②野辺地駅でJR大湊線（大湊行）に乗り換え、約10分で有戸駅着。
　次の吹越駅までの区間、海沿いの線路が続く。

vol.2

［ワールドレポート］

World Report

子どもたちに学校を

シリア難民キャンプの音楽教育（前編）

松永晴子さん

高校の美術教員を経て、日本人学校の教員としてベトナムに赴任。その後、青年海外協力隊としてヨルダンへ渡り、他支援団体での勤務を経て、現在はKnK駐在員としてシリア難民の子どもたちへの教育支援に携わる。

ヨルダンにあるザアタリ難民キャンプでは、隣国シリアから逃れてきた約８万人の人々が避難生活を送っています。長引くシリア危機によって教員や物資が不足し、将来の見通しが立たない中で、子どもたちの学習意欲も低下しています。そのような環境においては、特に子どもたちの情操面をサポートする教育が必要不可欠です。「NPO法人 国境なき子どもたち（以下KnK）※」は「音楽」「演劇」「作文」を三本柱として、難民キャンプの子どもたちに教育支援を行っています。音楽の授業で歌を歌ったり、演劇を通して自分自身を表現したりすることは、子どもたちの心を癒やし、学校に来るきっかけづくりにもなっています。今回のレポートでは、KnK現地駐在員である松永晴子（まつながはるこ）さんの活動報告をお届けします。

※1997年に日本で設立され、これまで15ヵ国（地域）において8万人以上の子どもたちに教育機会を提供し、自立を支援している。

シリアとヨルダンについて

地図で見ると、シリアが北、ヨルダンが南に位置しており、シリアのほうがおよそ２倍の国土をもっています。内戦前は2200万人ほどいたといわれるシリアの人口は、当時のヨルダンの人口600万人に比べると3.5倍ほどになります。２倍の国土で３倍以上の人々を養ってきたシリアは、文化もさることながら、農業も盛んで地下資源もある豊かな国でした。

現在は、国民の４分の１ほどが難民として国外へ逃げ出したうえ国内にとどまった人口の４割超が国内避難民（自国内で避難生活を送る人たち）だといわれるシリア、片や隣国の難民を受け入れて人口が大幅に増加したヨルダン。どちらの国にも、内戦の影響は重く暗い影を落としています。

美術教員からヨルダンへ渡ったきっかけ

美術の世界では、美大を卒業したからといって美術家になれる人はほんのわずかしかいません。彫刻専攻だった私は、美術教員をしながら細々と制作を続けていました。アラブ美術で有名なのは、アラベスクなどの幾何学模様です。その模様を用いた工芸品なども有名で、それらを生み出す技術の多くは、文化の中心となる都市で伝承されていました。シリアの首都ダマスカスには、高度な技をもった職人がたくさんいる──。そう聞いたことが、アラブの世界に興味を抱くきっかけでした。

難民の少女に話しかける松永さん

アラブ圏の仕事を探すにあたり青年海外協力隊の募集を見てみると、UNRWA（国連パレスチナ難民救済事業機関）が運営する学校での美術教員の職がありました。派遣先はシリアまたはヨルダンで、勇んで応募したのが2010年のことです。第1志望のシリアの要請は取り下げられたため残念ながら行くことがかなわず、第2志望のヨルダンへ派遣されたのが2011年、そのときは既に内戦が始まっていました。

KnKによる教育支援

KnKは、シリアからヨルダンに難民としてやってきた人々が住むキャンプの一つ、ザアタリ難民キャンプで、音楽や演劇、作文などの情操教育の授業を実施しています。キャンプ内の公立学校は、子どもたちの人数に比べて教室が足りず、2部制（午前中が女子、午後が男子というシフト制）を取っています。

子どもたちの多くは、私たちの想像を絶する情景を目にし、辛い経験をしているため、心の中に不安やトラウマを抱えていました。そんな子どもたちのために、心にたまったものを自分なりの方法で表現したり、安心して過ごしたりできる時間を提供しようと、KnKが授業を開始したのが2013年でした。

中には何年も学校に行けず、通学するのが久しぶりだという子どもたちも少なくありませんでした。避難する前とは教科書も違えば先生もクラスメートも異なるため、学校をふだんの生活の一部として認識し落ち着いて過ごせるようになるには時間がかかりました。授業中にうろうろしてしまう子、シリアや祖国の歌を歌いながら涙を流す子、先生の話を聞かずにぼうっと焦点の合わない目を中空に向ける子……その様子は、日本で教員をしていた私の目にどこかがおかしい、と感じさせるものでした。

難民キャンプは、春から夏にかけて砂ぼこりが舞い、夏は乾燥して暑く、冬は雪も降るうえ、自由に中と外を行き来することができない空間です。そのような環境で数年を過ごすのは子どもたちにとってたいへん過酷ですが、希望を失わず、自分たちでより明るい未来をつかみ取るための手助けをしていきたいと考えています。彼らの抱える問題も、この5、6年という月日とともに変化しているため、ニーズに合わせて少しずつ内容を変えながら事業を継続しています。

冬のザアタリ難民キャンプ。
道の両側にバラックがぎっしりと立ち並ぶ

円陣を組んで歌う少年たち

日本からの贈りもの

今年３月、KnKを通じて、教育芸術社よりザアタリ難民キャンプに五線ノート「Music Sketch（ミュージック・スケッチ）」が届けられました。新学期に合わせて現地の子どもたちに配られ、音楽の授業で使われています。

紹介ページ
https://www.kyogei.co.jp/data_room/bouquet/no3_wr.html

五線ノート配布時の様子や、子どもたちが歌を歌っている動画をご覧いただけます。

五線ノートを手に取って

音楽科は2013年の事業開始からずっと継続している授業の一つです。子どもたちにとっても、学校に行って授業を受けるということがやっと日常になり、ただ大きな声で歌を歌うだけではなく、楽理や楽器を用いた授業もできるようになってきましたが、教材やノートは十分にありません。そこで今回、日本から五線ノートを送っていただくことになりました。

子どもたちは、人からものをもらうことに正直慣れているとも言えます。たくさんの支援が入り、自分たちの生活が支援のうえに成り立っているのを分かっているのです。ただ、その多くが最低限必要なもの、例えば学校ならば文房具と通学バッグなどであり、それ以上のものを一人一人にご寄付いただく機会はあまりありませんでした。日本から届いた五線ノートは、表紙もきれいで輝いて見えていたことでしょう。

ノートを配布するとき、KnKの教員が子どもたちに次のような話をしてくれました。

「このノートに自分たちがもっているすてきな音楽を記録していって、いつかシリアに戻ったときにその曲をいつでも歌えるように、また弟や妹に教えられるように、大事に使ってください。音楽は世界共通の言語ですから」

このメッセージを真剣に聞く子どもたちを見て、ただただ、ありがたいと感じました。

アラビア語は右から左へ文字を書くので、楽譜を逆から書いてしまう子どももいますし、五線譜の狭い行間に最初はとまどう子どももいましたが、少しずつ慣れてもらえたらと思います。今までは普通のノートに手書きで無理やり五線を書き、さらに音符を書き足してぐしゃぐしゃになっていましたが、やっと自分だけの、音楽専用のノートができて、子どもたちは喜々として使っています。

（文：松永晴子／写真：国境なき子どもたち）

歌の歌詞を書いたノート

後編では、
難民キャンプで行われている
音楽の授業の様子や、
アラブ圏の音楽文化について
紹介していただく予定です。

文中の地名は筆者の表記にそろえています。

Oh（オー）My（マイ）ゴツイ先生 #2

作：魚師（さかなし）（ぶりちゃん）

タイトルロゴ：石野春加（DAI-ART PLANNING）